

# 中国・内モンゴル自治区<sup>はりんうき</sup>巴林右旗におけるモンゴル民族と漢民族の共存形態

鄭 国 全\*

本研究は、内モンゴル自治区赤峰市の巴林右旗を事例として、牧畜地域におけるモンゴル民族と漢民族との共存形態を、両民族の人口の変化と分布状況、民族言語の使用状況、民族教育の様態および民族間の交流に視点を置いて考察したものである。

巴林右旗へは、清国時代末期に実施された「移民実辺政策」および中華民国時代の開拓政策によって多くの漢民族が移住した。その結果、従来の遊牧地域が耕種農業と牧畜業の混交した地域に転じ、モンゴル民族と漢民族の共存社会が形成された。さらに中華人民共和国建国後には、巴林右旗へ多くの漢民族が新たに移住し、漢民族の人口はモンゴル民族のそれを上回ることとなった。一方、自治民族の優遇政策などによりモンゴル民族の人口増加率は漢民族のそれより高い。両民族の分布はそれぞれの生業を反映しており、モンゴル民族は牧畜地域のソムに集中しているが、漢民族は農業地域の郷鎮に多く分布し、農業や商業に従事している者が多い。

巴林右旗のモンゴル民族の大部分はモンゴル語を使用している。モンゴル民族に対する学校教育ではモンゴル語による民族教育が行われているが、モンゴル語を学習するモンゴルの生徒数は減少する傾向にある。

両民族間の交流をみると、モンゴル民族と外部地域の漢民族との経済交流は盛んであるが、巴林右旗地域内の漢民族との経済交流は少ない。また、両民族間の交友と結婚は、両民族の分布状況によって異なる。すなわち、両民族が雑居している地域では交友と結婚が頻繁にみられるが、両民族がそれぞれほぼ単独で居住する地域間では、両者の交友と結婚はほとんどみられない。

[キーワード] 1 蒙地開墾 2 巴林右旗 3 モンゴル民族 4 漢民族 5 共存形態

## I はじめに

### 1. 研究の背景

中国は多民族国家であり、55の少数民族が存在している。2000年センサスによると、中国の少数民族の人口は約1億で、総人口の8%を占めている。主な少数民族集中地区は、内モンゴル自治区・広西チワン族自治区・西藏チベット自治区・寧夏回族自治区・新疆ウイグル自治区の5自治区と、自治区に準ずる多民族省として指定されている貴州省・雲南省・青海省などであり、これらの面積は中国全土の64%を占めている(雲, 2000)。中国の少数民族問題は、民族間の経済的・文化的格差に関してみられ、政治的には基本的に解決済みとされている(関, 1984)。すなわち、民族間の経済格差・文化格差が縮小するにつれて、民族間の不平

等は解消すると考えられている(松村, 1993)。しかしながら、1980年代における東部沿海地域での改革開放政策が進むにつれて、少数民族地域と東部地域との経済・文化格差はさらに拡大してきた。そのため、中国政府は、1990年代末から両者の経済・文化格差を縮小するため、少数民族地域をめぐる西部大開発戦略<sup>1)</sup>を実施した。

西部大開発を円滑に行うためには、西部地域における少数民族の歴史やその特性などの基本的調査が重要である。すなわち、近代化の進展により、少数民族地域の社会・経済・人口構成などが急速に変化し、各少数民族の要求や、願望なども変化している。それらを十分に認識し、民族政策に反映させる必要がある。特に少数民族地域における漢民族と少数民族との共存に関する研究は最も重視されるべきものであろう。

\* 立正大学大学院研究生

## 2. 少数民族と漢民族の関係に関する従来の研究

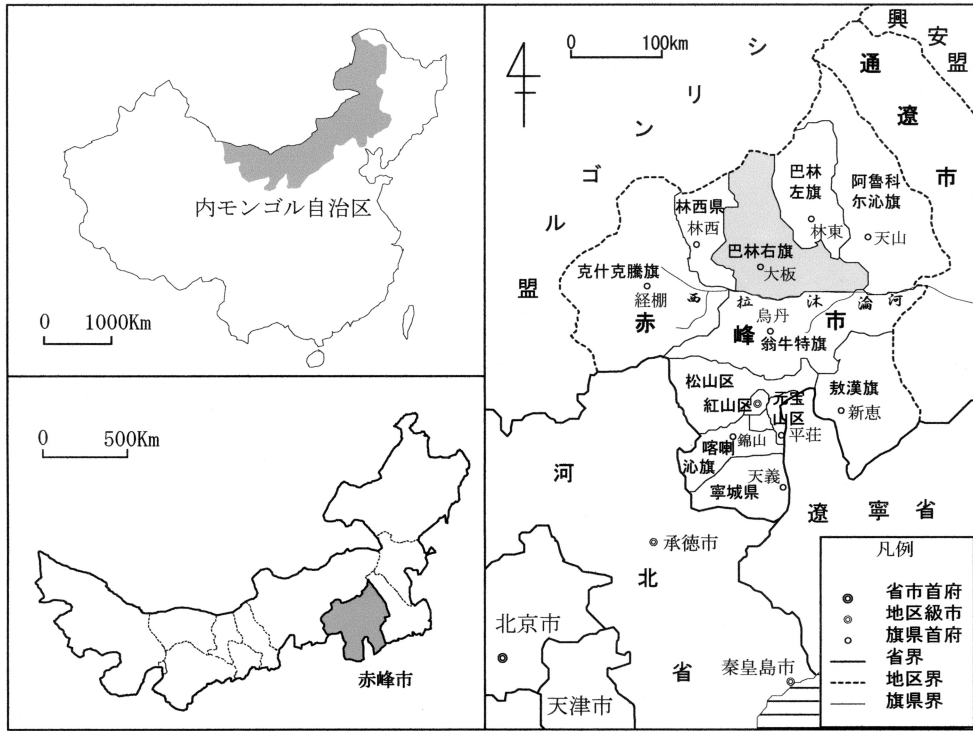
複数民族の雑居地域における民族関係の研究をみると、Gordon, M. (1964) は、民族の融合の程度を①民族文化の融合、②民族社会組織のネットワーク、③民族間の結婚、④民族間の相互理解、⑤民族間の偏見の解消、⑥民族間の蔑視の解消、⑦価値観と権力衝突の解消などの七つを指標として分析している。さらに、民族間の触れ合いが頻繁になり、社会組織ネットワークが相互に形成され、民族間の偏見や蔑視が基本的に解消した後に民族間の結婚率が増加すると主張している。

その後、中国人研究者は Gordon, M. の民族関係に関するこの指標を用いて、中国における民族関係の理論体系を構築した。すなわち、馬・潘 (1988・1989) は赤峰地域におけるモンゴル民族と漢民族の民族関係を研究し、馬 (1990) はラサにおけるチベット民族と漢民族の民族関係を究明し、吉・高 (1993) は新疆ウイグル自治区におけるウイグル族と漢民族の融合を計量的に分析した。さらに、日本人の研究をみると、高橋 (2000, 2002) は寧夏回族自治区を研究対象として、回・漢民族混住農村の社会構造、居住形態および経済活動の差異について論じている。

内モンゴル自治区に関する研究をみると、主として社会学的な視点から進められるものが多い。すなわち北京大学社会学研究所は、内モンゴル地域におけるモンゴル民族と漢民族の民族関係を究明するために、1985年に赤峰市の農村と牧畜地域で2,089世帯に聞き取り調査を実施し、言語の使用、居住形式、民族間の交流状況、民族間の結婚など、多方面にわたって調査している。それらの調査結果に基づいて、馬・潘 (1988) は調査対象をモンゴル民族と漢民族に分け、社会や経済など各方面にわたり比較することによって、民族間の差異を明らかにした。さらに、中華人民共和国成立後の民族政策の実施により、モンゴル民族の水準が政治・経済・文化・教育など多方面で向上し、漢民族との差異がなくなりつつあり、民族間の交流が拡

大していることを指摘した。また、馬・潘 (1989) は民族構成の割合が居住形式および民族間の交流に影響を与えていることを指摘した。さらに、潘・馬 (1994) は、赤峰市翁牛特旗 (オンニュード) での調査をもとに、「半農半牧」社会が抱える農耕と牧畜との対立、漢民族移住がもたらした先住民社会に対する諸問題を考察し、東部内モンゴル社会に関する研究の最新のモデルを提示した。都市地域における民族関係について、王 (2000) は、内モンゴル自治区の区都フフホトにおけるモンゴル民族、漢民族、回族および満族を研究対象とし、各民族の移住と住居の配置、行政、教育、職業、言語、結婚、宗教、民族意識などから、都市地域における民族関係を分析し、都市における民族間の交流の特徴を明らかにした。一方、岡本 (1999) は、内モンゴルにおける民族教育を清国時代、中華民国時代、満州国時代、中華人民共和国成立後の四つの時代に分け、モンゴル民族に対する民族教育の時代的特性を明らかにし、漢民族の内モンゴルへの大量移住によってモンゴル語が使用されなくなる傾向を指摘した。ボルジギン・ブレンサイン (2003) はモンゴル民族の農業集落を対象とし、清国時代末期に実施された移民実辺政策に基づく蒙地<sup>2)</sup>開墾によって、先住民であるモンゴル民族が牧畜を営む場を失い、やむを得ず農耕へ転換したことを指摘し、モンゴル民族の農業集落の形成および多民族村落社会の統合の様態を明らかにした。

これらの研究は、いずれも民族関係に着目した研究である。しかしながら、牧畜地域におけるモンゴル民族と漢民族との共存形態について論じられた研究は少ない。そこで、本研究は、内モンゴル自治区赤峰市の牧畜地域である巴林右旗を研究対象として、ここにおける蒙地開墾の歴史と移民社会の形成過程を明らかにし、さらに、巴林右旗におけるモンゴル民族と漢民族の人口の変化と分布、民族教育、両民族の経済関係、交友関係、婚姻関係を明らかにすることにより、両民族の共存形態を解明しようとするものである。



第1図 研究対象地域

## II 巴林右旗の概要

### 1. 地理的位置と行政区画

巴林右旗は内モンゴル自治区の東部にあり、遼河の支流である西拉沐淪河の北岸で、大興安嶺山麓南部に位置する。その面積は10,256km<sup>2</sup>で平均高度は1,000mである。巴林右旗は、典型的な温帯季節風性大陸気候に属する地域にあり、夏は南東季節風の影響を受け、降水は集中するが、その量は少ない。冬期は長く、北西季節風が吹き、気温の変化も大きい。年平均降水量は358mmで、年平均気温は4.9℃であり、遊牧地域となっている。

巴林右旗は、赤峰市に属し、その行政区をみると、大板・巴彥漢・巴彥琥碩・宝日勿蘇の4鎮、羊場・朝陽の2郷、索博日嘎・巴彥塔拉・幸福之路・胡日哈・沙巴尔台・崗根・查幹諾尔・益和諾尔・西拉沐淪・查

幹沐淪の10ソム<sup>3)</sup>に区分される。農牧業による集落区分をみると、巴林右旗には68農業村と78牧畜ガチャー<sup>4)</sup>が存在する(第1図)(第2図)。巴林右旗全体の人口は17.7万(2003年)で、そのうちモンゴル民族が83,447人であり、これは総人口の約47%を占めている。巴林右旗は、赤峰市の中でモンゴル民族の割合が最も高い行政区となっている。巴林右旗では、豊富な牧草を利用した遊牧が古くから行われてきたが、最近では牧畜民が定着して、牧畜業と耕種農業が併存し、半農半牧畜地域となっている。

### 2. 巴林右旗の歴史の変遷

『巴林右旗誌』によれば、清国の太祖皇太極が、1634年にチャハル(察哈尔)地域を占領し、その直後にモンゴルにおいて遊牧を行うことのできる地域を定めた。モンゴル族の一部族である巴林部の遊牧地域は



第2図 巴林右旗の行政区画（2004年）

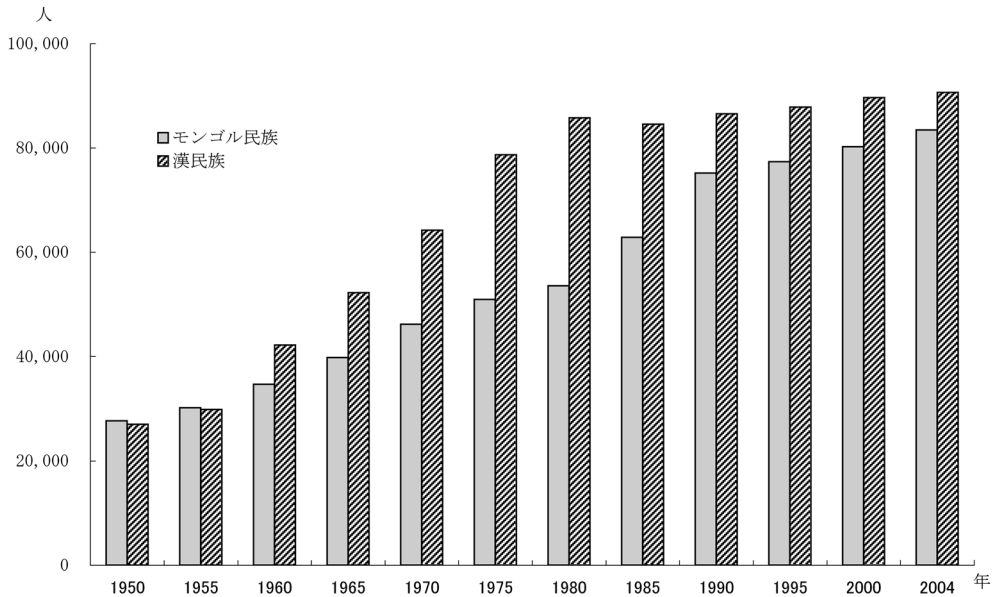
西拉沐淪河中流地域の北岸に定めた。この地域は、阿魯科尔沁旗、翁牛特旗、克什克騰旗、烏珠穆沁旗にそれぞれ接していたが、これらの旗はその後赤峰市林西県、巴林左旗、巴林右旗と名称を変えている。1684年に清国政府は巴林遊牧地域で「旗制」を実施し、巴林右翼旗と巴林左翼旗の二旗に分けたが、両旗の境界を詳しく画定しないまま、遊牧は260年間ほど続けられてきた。1906年に清国政府は、巴林地域に「移民実辺<sup>5)</sup>」と中心とする「新政」を実施し、翌年「巴林旗墾務局」を設置し、巴林地域の西部に漢民族を移民させた。そして、ここに巴西県（現在の林西県）を設置して、草原の開墾を本格的に始めた。1912年8月に清国政府墾務局は、巴林左右翼旗と協議し、巴林右旗と巴西県の境界を確定した。この頃までに巴林地域の遊牧地では約8,000haの草原が開墾され、遊牧地域は半減していた。1921年に中華民国政府は林東墾務局を

設置し、約21.6万 ha の開墾地域を定め、巴林東部地域で開墾を始めた。草原開墾によって、巴林遊牧地域の遊牧民は中部地域に集中させられ、遊牧地域は狭くなり、牧場の境界をめぐるトラブルが絶えず発生するようになった。その解決のために、巴林右旗と巴林左旗の境界が、中華民国蒙蔵院により定められた。1924年には巴林東部の開墾地域内で林東県が設置され、遊牧地域は巴林右旗のみに限定された。中華人民共和国成立後においても遊牧地域は巴林右旗のみに限定されている。

### III モンゴル民族と漢民族の分布

#### 1. 中華人民共和国成立後におけるモンゴル民族と漢民族の人口の変化

モンゴル民族は巴林右旗における先住民として、古



第3図 中華人民共和国建国後における巴林右旗のモンゴル民族と漢民族人口の変化

資料：『巴林右旗誌』（1986年版）、『赤峰市誌』（1990年版）、『赤峰年鑑』（1995・2000・2004年版）により作成

くから遊牧を行ってきた。清国政府は1634年に、巴林右旗を巴林部モンゴルの遊牧地域として画定した。この地域への最初の漢民族移民は、モンゴル貴族に嫁いだ満清皇族の女性の付添として移住してきた漢民族であった。彼らはモンゴル民族と同化するようになった（高，2001）。『赤峰市誌』によれば、清代末期に清国政府は「移民実辺」政策を実施し、これにより漢民族の移住が本格的に始まった。当時、山東や河北などの地域に居住していた漢民族は、モンゴル貴族の「招墾<sup>6)</sup>」に応じ、南部の喀喇沁や翁牛特地域を経て巴林右旗に入植してきた。漢民族はモンゴル貴族から土地を租借して開墾し、収穫の2～3割をモンゴル貴族に地租として支払い、残りを収入とした。現在でも「二八地」や「三七地」などという当時の税制を表わす地名が残っている。

このように、清国時代末期から中華民国の時代にかけて、巴林右旗には多くの農業集落が出現した。特に中華民国の時期には土地の売買が一時的に自由化され、漢民族の移住がさらに増加した。

巴林右旗における中華人民共和国成立後のモンゴル民族と漢民族人口の変化をみると、モンゴル民族の人口は1950年に2.7万であったが、2004年には8.3万まで増加した（第3図）。その間、巴林右旗の人民政府は、1960年に内モンゴル自治区人民政府の指示に基づいて、赤峰市南部の寧城県や翁牛特旗に住むモンゴル民族の175世帯730人を受け入れた。その後、幹部の配属や結婚などによって、モンゴル民族の移入が続き、モンゴル民族の人口が持続的に増加した。さらに、1980年代からは「一人っ子政策」が厳格に実施されたことにより漢民族の人口増加がおさえられた。一方、少数民族に対しては優遇策が取られ、モンゴル民族などに対しては「二子又は三子政策」が実施されているため、モンゴル民族の人口は増加した。さらに、若い世代で両民族間の結婚は増える傾向にあり、その間に生まれた子供はモンゴル民族として登録する機会が多く、このことがモンゴル民族の人口増加率を高める一つの要因となっている。

漢民族の大規模な移住は、中華人民共和国の成立前

第1表 赤峰市巴林右旗における民族人口の情況（2003年）

行政地域	面積 km <sup>2</sup>	世代	総人口	モンゴル民族	漢民族	その他の民族	農村	牧村（ガチャ）
大板鎮	1,052	7,502	54,021	22,196 (41%)	30,673 (56%)	1,152	10	9
巴彥琥碩鎮	425	3,147	8,305	1,408 (17%)	6,465 (78%)	432	9	1
羊場郷	403	2,604	12,244	1,784 (15%)	10,328 (84%)	132	7	0
朝陽郷	543	2,518	11,043	1,354 (12%)	9,653 (87%)	36	7	1
宝日勿蘇鎮	1,191	3,252	18,454	10,737 (58%)	6,753 (37%)	964	6	11
巴彥漢鎮	877	772	12,458	7,441 (60%)	5,025 (40%)	22	5	9
索博日夏蘇木	1,018	2,673	12,969	5,187 (40%)	7,759 (60%)	23	6	5
巴彥塔拉蘇木	830	2,339	10,755	6,713 (62%)	4,007 (37%)	35	1	10
幸福之路蘇木	493	1,303	6,284	4,914 (78%)	1,271 (20%)	99	2	6
胡日哈蘇木	530	889	5,627	4,745 (84%)	845 (15%)	37	1	3
沙巴尔台蘇木	589	3,036	4,356	3,455 (79%)	897 (21%)	4	1	5
崗根蘇木	568	951	4,505	2,594 (58%)	1,911 (42%)	0	2	4
查幹諾爾蘇木	567	899	4,306	3,144 (73%)	1,162 (27%)	0	1	5
益和諾爾蘇木	569	698	4,420	4,296 (97%)	123 (3%)	1	0	4
西拉沐淪蘇木	203	805	3,703	1,814 (49%)	1,793 (48%)	96	7	3
查幹沐淪蘇木	392	798	3,647	1,665 (46%)	1,982 (54%)	0	3	2
合計	10,250	34,186	177,097	83,447 (47%)	90,647 (51%)	3,033	68	78

資料：『巴林右旗年鑑』（2004年版）により作成

にも行なわれていたが、漢民族人口がモンゴル民族の人口を上回ることにはなかった。しかし、1950～60年代に巴林右旗は自然災害による難民の受け入れ地となり、遼寧省や河北省、赤峰市南部地域などから約2000世帯、1万人の漢民族が移住してきた。これにより漢民族人口はモンゴル民族人口を上回るようになった。その後も漢民族の移住は絶えず行なわれ、1980年には漢民族人口の割合が60%に達した。しかし、1980年代以後は民族区域自治法や民族優遇政策などが実施されたことにより、モンゴル民族と血縁関係を持っている漢民族はモンゴル民族を名のるようになった。そのため、1985年には1980年と比べて漢民族人口が統計的に約3,000減少した。

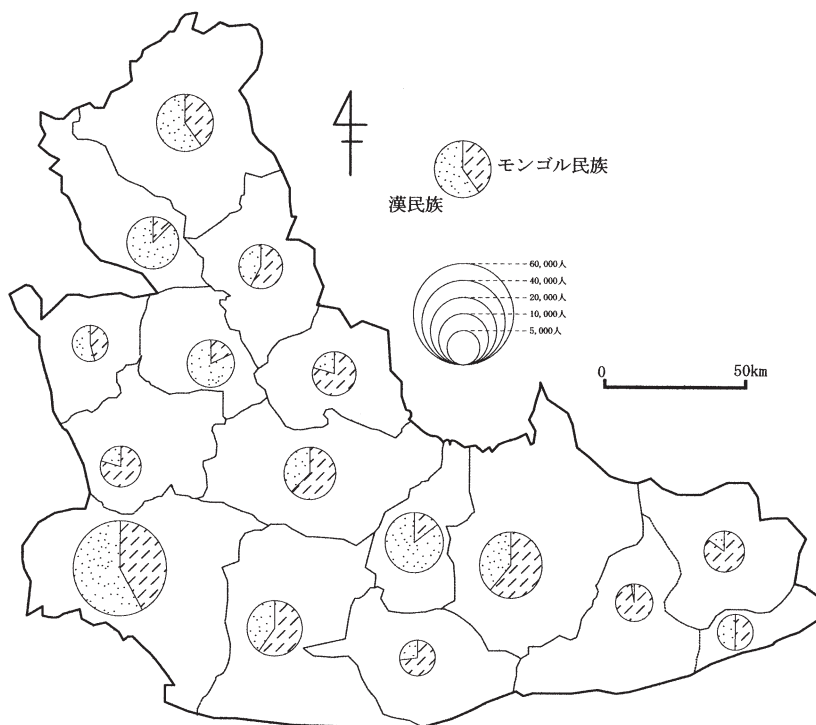
1990年代以後には改革開放政策が影響して、巴林右旗は人口の増加地域から人口の減少地域に転じている。

## 2. モンゴル民族と漢民族の分布

第1表および第4図に示すように、巴林右旗の16郷・鎮・ソムにはモンゴル民族と漢民族がともに在住し、モンゴル民族と漢民族は混住している。しかし、詳し

くみると、漢民族人口の約63%が郷および農業地域の鎮に集中しているのに対して、モンゴル民族人口の約32%は郷・農業地域の鎮に居住している。すなわち、漢民族は耕種農耕地域の郷および都市化の水準が高い鎮に居住し、農業および商工業に従事しているが、モンゴル民族は牧畜地域のソムで牧畜業を営む場合が多い。さらに、行政村別に漢民族集落、モンゴル民族集落および蒙漢雑居集落に分けて、民族分布を集落別にみると（第5図）、巴林右旗ではモンゴル民族集落が74、漢民族集落が26、蒙漢混住集落が46となっている。そのうち、各郷・鎮・ソムの中心地はすべてモンゴル民族と漢民族が混住している。

以上のように、巴林右旗では全体的にみれば漢民族とモンゴル民族は混住しているようにみえるが、より詳細にみるとモンゴル民族と漢民族は分かれて居住している場合が多い。



第4図 巴林右旗におけるモンゴルと漢民族の分布（2003年）

注：行政区画は第2図と同じである。

資料：聞き取り調査により作成

#### IV モンゴル語とモンゴル民族教育

##### 1. モンゴル語の使用状況

赤峰市は全体的にみれば、モンゴル民族が少なく、漢民族が多数を占める地域であり、モンゴル語が形骸化する傾向がある（鄭，2004）。しかし、赤峰市のうちで牧畜地域となっている巴林右旗をみると、モンゴル民族の割合が高く、モンゴル語は主体民族の言語として広く使用されている。

査幹哈達（1994）は、モンゴル語の使用状況によって内モンゴル地域をモンゴル語地域、モンゴル語と中国語併用地域、中国語地域に三分しているが、巴林右旗についても同様に三分することができる。すなわち牧畜村はモンゴル民族のみが居住している村であり、モンゴル語が日常用語として使用されており、ここは

モンゴル語地域に区分される。また、モンゴル民族と漢民族が混住している村・各郷鎮ソムの中心地は、モンゴル語と中国語併用地域である。そして、農業を営む漢民族のみ居住している村は漢語の使用地域となっている。

また、巴林右旗の民族宗教事務局モンゴル語委員会によれば、巴林右旗ではモンゴル民族の80%以上がモンゴル語を話すことができる。ここでモンゴル語の使用状況に関して、旗の中心地である大板から約18km離れた麻斯他拉ガチャー（第2図）における状況を考察してみよう。麻斯他拉ガチャーはモンゴル民族の牧畜村であり、2003年5月の人口は246で、ここに住む人のすべてがモンゴル語を話せる。ここでのモンゴル語と漢語の使用について、モンゴル語のみできる階層、モンゴル語と漢語の双方ができる階層に分けて、年齢



第5図 巴林右旗における蒙漢民族別の集落の分布（2003年）

注：行政区画は第2図と同じである。

資料：聞き取り調査により作成

別にみると、50歳代以上は80%以上がモンゴル語のみできる階層に属している。これは、50歳代以上の多くは、体系的な学校教育を受けたことも村を離れたこともなく、漢語と接触する機会がほとんどなかったためである。一方、50代以下の90%以上は漢語ができる。特に30代以下はすべて漢語ができる。これは、学校教育による結果とみられる。しかし、漢語は日常的には使用されていないために、流暢な漢語を話せる者は限られている。

巴林右旗のマスコミは、漢語の他にモンゴル語も使用している。ここではモンゴル語版の「内モンゴル日報」、**「赤峰日報」**および**「巴林新聞」**が発行されており、モンゴル語によるラジオ・テレビ番組も豊富である。

以上のように、モンゴル民族人口の割合が高い巴林

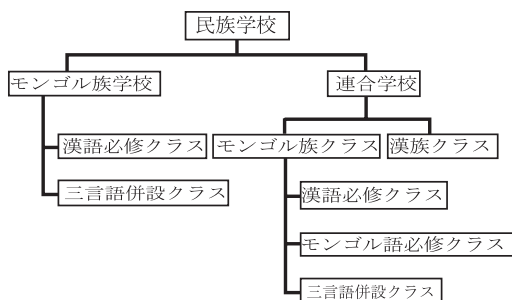
右旗では、モンゴル語が日常的に使われている。すでに筆者が明らかにしたように（鄭 2004）、巴林右旗では農耕地域の場合とは異なって、モンゴル語が単なるモンゴル民族のシンボルとなるという傾向はみられない。

## 2. モンゴル民族教育

巴林右旗における学校教育をみると、モンゴル民族のみが通う学校ではモンゴル語で授業が行われている。一方、漢民族および他の少数民族が通学する「民族連合学校」では、漢語で授業が行われている。モンゴル民族が集中している地域ではモンゴル民族学校が一般的であり、民族雑居地域には民族連合学校が多い。

民族連合学校の場合には漢民族クラスとモンゴル民族クラスが併設されている。モンゴル民族学校は中国





第6図 民族教育の類型  
資料：聞き取り調査により作成

語を必修科目として履修し、通常の授業はモンゴル語で行なわれている。民族連合学校ではモンゴル民族のクラスを「モンゴル語授業班」と「漢語授業班」に分けている。「モンゴル語授業班」においては漢語が必修科目とされ、モンゴル語で授業を行うのに対し、「漢語授業班」では漢語で授業が行なわれ、モンゴル語が必修とされる。さらに、モンゴル語と漢語以外の外国語との「三言語併設クラス」も存在する(第6図)。

巴林右旗にはモンゴル民族学校が35校あり、そのうち小学校が25、中学校が8、普通高校と職業高校が各1である(第2表)。巴林右旗におけるモンゴル民族の学生数は、2003年に12,364人で、そのうち、約7,000人がモンゴル語で行う教育を受けている。さらに約4,000のモンゴル民族の生徒は連合学校でモンゴル語を学習している。残りの約1,000人は漢民族と同じように普通学校へ通学している。すなわち、巴林右旗のモンゴル語を学習している生徒はモンゴル生徒総数の91.7%を占めているが、この値は赤峰市の平均56.1%より高く、モンゴル語教育の普及率は高い。しかし、大学卒業生の就職活動は自主的に行なわれているため、

少数民族言語で教育を受けた少数民族の大学生は不利である。そのため、モンゴル民族の家庭では、子供をより良い仕事につかせるため、漢民族と同じように子供に普通教育を受けさせるようになりつつある。そのため、モンゴル民族が集中している巴林右旗においてもモンゴル語を学習する生徒が減少する傾向にある。

## V モンゴル民族と漢民族間の諸関係

清国時代に巴林右旗ではモンゴル民族のみが居住していた。清国政府はモンゴル民族を統治するため、従来の部族を旗とし、遊牧境界を画定し、モンゴル民族の部族間およびモンゴルと漢民族の交流を規制していた。そのため、この時代にはモンゴル民族と漢民族の交流関係はほとんどみられなかった。しかし、清国時代末期からの「蒙地放墾」によって、漢民族が多く移住してきたため、モンゴル民族と漢民族の交流が頻繁に行なわれるようになってきた。ここで、漢民族の交流関係について考察しよう。

### 1. 経済的な関係

モンゴル民族と漢民族が頻繁に接触するようになったのは、モンゴル民族の定住化が進んだ清国時代末期からである。漢民族の進出によって、しだいに草原が開墾され、モンゴル民族は遊牧が不可能となり、やむを得ず定住するようになった。この時期には、モンゴル民族は地主として漢民族を雇い、家畜の放牧や農地の耕作をまかせ、モンゴル民族と漢民族は雇用と被雇用の関係にあった。中華人民共和国成立後における社会主義経済の進展によって、モンゴル民族の家畜およ

第2表 巴林右旗における学校の数(2004年)

	モンゴル民族学校	民族連合学校	漢民族学校	合計
小学校	13	12	59	84
中学校	3	5	3	11
高校	1	1	3	5
合計	17	18	65	100

資料：2004年2月の聞き取り調査により作成

び耕地はすべて「人民公社」に吸収され、国有化された。1980年代に家畜請負制が実施されると、放牧地が分割された。それらの一連の変革によりモンゴル民族と漢民族は同じ社会的地位に立つようになった。

同一集落に居住するモンゴル民族と漢民族は2004年には、それぞれ独自に職業を持っており、同一地域内での両者の経済交流はわずかにみられるだけである。しかし、牧畜を行っているモンゴル民族と、これに隣接する外部の農耕地域に住む漢民族との間では、密接な経済交流が行われている。改革開放以前にはソム・郷など行政区を超える経済交流は制限され、羊毛、羊皮および羊肉などの畜産品は自由に売買することができず、原則的に当該地域の人民公社へ売却が義務づけられていた。実際には、当該地域と外部地域でのそれらの価格差はかなり大きかった。改革開放後にそれらの制限が解除され、行政区域を越える経済交流が行われるようになった。多くの畜産品は第3表に示すように巴林右旗と南部の耕種農業地域との間に価格差が存在しており、これが牧畜業に従事するモンゴル民族と南部の漢民族の経済交流を促進することになった。

牧畜地域では、干ばつや大雪に見舞われると、牧草が欠乏する状態にあり、牧畜民は困窮することになる。そのため、大量の食糧および飼料となる牧草の確保が必要となる。このような時には、羊などと交換して、耕種農業地域の農作物を入手する例が極めて多い。このような経済的関係は必ずしも緊急時のみに止まっているわけではない。漢民族はモンゴル民族の牧畜民に

牧草の収穫や羊毛の刈り取りのための労働力のほか、野菜・果物・日常雑貨などを提供し、羊などを交換物として得ている。

このような経済的関係は多くのモンゴル民族でもみられる。漢民族は家畜を農耕地域で飼育することができないため、モンゴル牧民に肥育を委託する。一方、漢民族の農民は牧草などを無料または安い価格で提供するという契約を結んでいる。モンゴル民族は自らの牧場で複数の所有者の家畜を飼育するということが多くみられる。そのような関係をもつ漢民族ははだいに増加の傾向を示している。このように、巴林右旗の牧畜地域においては、モンゴル民族と漢民族との経済的交流関係がますます親密になっている。

## 2. 両民族間の交友および結婚

モンゴル民族と漢民族の交友関係および結婚について、巴林右旗大板鎮の麻斯他拉ガチャーと套白村において2003年に調査した結果を考察しよう。

麻斯他拉ガチャーの牧畜民は総人口362の98%に当たる355人で、このすべてがモンゴル民族であり、牧畜民の村を形成している。一方、套白村では漢民族とモンゴル民族が混住し、ともに耕種農業を中心としている。ここでのモンゴル民族は総人口674の47%に当たる317人である。

両民族間の交友関係を明らかにするため、モンゴル民族と漢民族の割合を考慮し、麻斯他拉ガチャーではモンゴル民族45人と漢民族5人を、套白村ではモンゴル民族50人とそれぞれ漢民族50人を調査対象として無作為に抽出し、民族別の友人関係について調査した。その結果を第4表に示した。これによれば、麻斯他拉ガチャーでは、モンゴル民族と漢民族はともにモンゴル民族の友人が多いと回答している。モンゴル民族45人のうち38人はモンゴル民族の友人が多く、6人はモンゴル民族と漢民族の友人が半々で、僅かに1人が漢民族の友人の方が多くと回答している。また、漢民族5人のうち3人はモンゴル民族の友人の方が多く、モ

第3表 2000年における畜産品の価格

単位：元

	巴林右旗	農耕地域
羊毛（1kg）	20	22
羊の皮（1枚）	50	54
羊（1頭）	300	350
バター（1kg）	25	30
羊の糞（100kg）	10	30
馬（1頭）	750	900
牛（1頭）	1,000-1,500	1,200-2,000

資料：『赤峰市年鑑』（2001年版）により作成

第4表 巴林右旗大板鎮におけるモンゴル民族と漢民族の交友状況（2004年）

	麻斯他拉ガチャ		套白村		合計
	モンゴル民族	漢民族	モンゴル民族	漢民族	
モンゴル民族が多数	38 (84%)	3 (60%)	28 (56%)	16 (32%)	85 (57%)
モンゴル民族と漢民族が半々	6 (13%)	1 (20%)	16 (32%)	12 (24%)	35 (23%)
漢民族が多数	1 (3%)	1 (20%)	6 (12%)	22 (44%)	30 (20%)
合計	45 (100%)	5 (100%)	50 (100%)	50 (100%)	150 (100%)

資料：2004年2月の聞き取り調査により作成

ンゴル民族と漢民族の友人が半々いると回答した漢民族は1人で、漢民族の友人が多数と回答した漢民族も1人であった。一方、套白村の場合は、モンゴル民族50人のうち28人はモンゴル民族の友人が多数と回答し、16人はモンゴル民族と漢民族の友人が半々であると回答している。残りの6人は漢民族の友人が多いと回答している。また、漢民族50人のうち16人はモンゴル民族の友人が多数で、12人は両民族の友人が半々であると回答し、22人は漢民族の友人は多いと回答している。また、調査対象150人のうち57%はモンゴル民族の友人が多いと回答している。

以上のように、モンゴル民族と漢民族との交友関係は両民族の居住形態と深く関わっていることが明らかになった。すなわち、麻斯他拉ガチャで示したように、モンゴル民族が大部分を占め、漢民族との接触する機会が限られている地域では、漢民族の友人が少ないという結果が出た。一方、套白村では、漢民族とモンゴル民族が混住し、両民族の交流が頻繁に行なわれているため、当然の結果として漢民族の友人が多くなっている。

牧畜業を中心とする巴林右旗では、モンゴル民族は先住民として古くから居住している。後発の移住民である漢民族は、円滑に生活できるようにするため、モンゴル民族との交流を積極的に行っており、そのため漢民族はモンゴル民族友人が多いと回答する割合が高くなったとみられる。そのなかでモンゴル語が両民族の交流を制限する要因の一つとなっている。しかし、牧畜地域に居住している漢民族は日常的なモンゴル語ができるため、モンゴル民族との交流は容易である。

両民族間の結婚については、民族の分布と深く関わっている。モンゴル民族がほとんどを占める麻斯他拉ガチャでは、両民族間の結婚はわずか1例であるが、両民族が混住する套白村には12例ある。現地調査の結果によれば、このような現象は、巴林右旗の他地域もみられる。単一民族の居住地域では、多民族と交流する機会が少なく、いわゆる「族内婚」がほとんどである。これに対して、両民族が混住している地域では、両民族間の交流が常に行なわれており、いわゆる「族際婚」が極めて高い。一方、農耕地域におけるモンゴル民族の「族際婚」は40%以上を占めている（鄭，2004）。これに対して、牧畜地域である巴林右旗では低い。巴林右旗では、モンゴル民族と漢民族の人口は相半ばしており、モンゴル民族は、言語や民族習慣などが農耕地域のモンゴル民族より維持しており、「族内婚」の傾向が強く現われている。

## VI おわりに

本研究は、内モンゴル自治区赤峰市巴林右旗におけるモンゴル民族と漢民族の分布、民族言語、民族教育、経済的交流関係、交友関係、婚姻関係について検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 巴林右旗へは、清国時代末期に実施された「移民実辺政策」および中華民国時代の開拓政策により、多くの漢民族農民が移住し、従来の遊牧地域から「半農半牧」地域に変容し、モンゴル民族と漢民族の混住社会が形成された。
- (2) 中華人民共和国成立の初期には、巴林右旗は自然

災害を受けた人々の受け入れ地域となり、多くの漢民族が移住してきた。そのため、漢民族はモンゴル民族を上回って人口の多数を占めることとなった。しかし、漢民族に対する「一人っ子政策」の影響もあって、この後におけるモンゴル民族の人口増加率は相対的に高い。

- (3) モンゴル民族と漢民族はおおまかにみると混住しているが、詳しくみるとよりモンゴル民族は牧畜地域のソムおよび鎮に集中しており、漢民族は耕種農業地域の郷鎮に居住している。モンゴル民族の大部分は牧畜業を生業とするのに対して、漢民族は農業および商業に従事している。
- (4) 巴林右旗のモンゴル民族はモンゴル語を日常的に使用している。モンゴル民族は、50歳代以上ではモンゴル語のみができる割合が高く、50代以下は学校教育を受けているため、漢語とモンゴル語の双方ができる。モンゴル民族生徒の多数は、モンゴル語で行う民族教育を受けている。民族学校では、モンゴル語、漢語、外国語という「三語併設」の教育を行っている。一方、モンゴル語を学習するモンゴル学生

は減少の傾向がみられる。

- (5) 同じ地域内で居住するモンゴル民族と漢民族との経済交流は少なく、他地域の漢民族との経済的交流が改革開放以後にみられるようになった。それらの経済交流によってモンゴル民族と漢民族は新たな関係が築かれようとしている。
- (6) 両民族の居住形態は、両民族間の交友および結婚に影響を与えている。モンゴル民族のみの村では、両民族の親交と結婚は極めて少ないが、両民族の混住している村は両民族間の親交と結婚はともに多くみられる。

#### 謝辞

本稿は、2003年度秋季学術大会（於岡山大学）で口頭発表した内容をもとに加筆・修正したものである。本稿の作成にあたり、立正大学地球環境科学研究科の内山幸久先生からは、多くのご指導・ご助言をいただいた。ここに記して、厚く御礼申し上げます。

（受付2004年8月31日）

（受理2004年10月1日）

#### 注

- 1) 西部大開発とは、経済発展が相対的に立ち遅れた内陸部を開発し、沿海部との経済の地域格差を縮小する開発計画である。西部大開発の対象地域としては、国土を東部、中部、西部に区分した12の省（自治区・直轄市）が含まれている。この地域は国土71%（686万平方km）、人口の約29%（3億5800万人）、GDPの約18%（1兆4600億元）を占めている（1998年の統計値）。
- 2) 蒙地という用語が頻繁に現れるようになったのは清国時代末期に実施された「新制」の頃からである。「移民実辺政策」の実施にあたって、清国政府は東北地域の満州八旗や漢軍八旗などの「旗地」とモンゴル旗の土地を区別するために蒙地という用語を使い始めたのではないかと考えられる。したがって、「蒙地」とはモンゴル旗の土地を開墾するという特殊な時代の言い方であり、その使用年代は清国時代末期から中華民国時代と満州時代にわたる約半世紀に限られていた。「蒙地」の整理に悩まされた満州時代に

は「開放蒙地」と「未開放蒙地」という用語が使用されている。

- 3) ソムはモンゴル特有の行政単位で旗の下にあり、郷鎮に相当する。
- 4) ガチャーは旗とソムと同じようにモンゴル地域における特有の行政単位であり、行政村に当たる。
- 5) 清国時代末期、清国政府は帝国主義列強の侵略を防ぐために、辺境地域に移住させ、草原を耕地化するなどの「新政」を実行した。「移民実辺」は「新政」の中心である。
- 6) 招墾は、内モンゴル南部に居住するモンゴル貴族が農業に適する地区で漢民族を招き、農業に従事させた政策である。

#### 参考文献

- 雲布龍（2000）：『中国西部概覽（内蒙古）』民族出版社、283p。  
王俊敏（2000）：『青城民族—一個辺疆城市民族關係的歴史遠

- 変一』天津人民出版社, 219p.
- 岡本雅享 (1999) : 『中国の少数民族と言語政策』社会評論社, 580p.
- 吉平・高丙中 (1993) : 『新疆維漢民族交融諸因素的量化分析』『辺区開発論著』北京大学出版社, 87-112.
- 高延青 (2001) : 『赤峰蒙古史』内蒙古人民出版社, 591p.
- 查幹哈達 (1994) : 『内蒙古自治区少数民族語言使用情況概述』中国少数民族語言研究組編『中国少数民族語言使用情況』中国藏学出版社, 24-96.
- 赤峰市巴林右旗地方誌編纂委員會 (1986) : 『巴林右旗誌』内蒙古人民出版社, 799p.
- 赤峰市誌編纂委員會 (1990) : 『赤峰市誌 (上・中・下)』内蒙古人民出版社, 3445p.
- 赤峰市地方誌弁公室 (1995) : 『1995赤峰年鑑』内蒙古科学技术出版社, 234p.
- 赤峰市地方誌弁公室 (2000) : 『2000赤峰年鑑』内蒙古科学技术出版社, 251p.
- 赤峰市地方誌弁公室 (2001) : 『2001赤峰年鑑』内蒙古科学技术出版社, 276p.
- 赤峰市地方誌弁公室 (2004) : 『2004赤峰年鑑』内蒙古科学技术出版社, 294p.
- 高橋健太郎 (2000) : 『回・漢族混住農村の社会構造と居住地の形態』地域学研究, 13, 12-18.
- 高橋健太郎 (2002) : 『回・漢族混住農村におけるエスニシティと經濟活動』經濟地理学年報, 48-1, 20-45.
- 鄭国全 (2004) : 『内モンゴル自治区の農耕地域におけるモンゴル民族と漢民族の共存形態』赤峰市寧城県の場合. 新地理, 51-4, 13-23.
- 潘乃谷・馬戎 (1994) : 『中国辺遠地区開発研究』Oxford University Press (Hong Kong), 345p.
- ボルジキン・フレンサイン (2003) : 『近現代におけるモンゴル人農業集落社会の形成』風間書房, 411p.
- 松村嘉久 (1993) : 『中国における少数民族政策の展開—雲南省を事例として』人文地理, 45-5, 51-74.
- 馬戎・潘乃谷 (1988) : 『赤峰農村牧区蒙漢通婚的研究』北京大学学报 (哲学社会科学版), 第3期, 76-87.
- 馬戎・潘乃谷 (1989) : 『居住形式, 社会交往与蒙漢民族關係, 濃赤峰調查看影響民族關係的因素』中国社会科学, 第3期, 179-193.
- 馬戎 (1990) : 『拉薩市区藏漢民族之間社会交往的条件』社会学研究, 第3期, 12-31.
- 閔言 (1984) : 『論歷史上遺留下来的民族間事实上的不平等』中国社会科学院民族研究所編『社会主义民族關係文献文集』雲南民族出版社, 585-594.
- Gordon, M. (1964) : 『Assimilation in American Life』New York, Oxford University Press, (1964), 70-82.

## The Compatible Formation of Mongolian and Han nationality in Balin Right Banner, Inner Mongolia, China

ZHENG Guoquan\*

[keywords] 1 Reclamation of Mongol Region 2 Balin Right Banner 3 Mongolian 4 Han nationality  
5 Compatible formation

\*Graduate Student, Rishso University